

オランダのアムステルダムにおけるアウトリーチワーク

田川 佳代子

1. はじめに

本稿は、オランダのアウトリーチワーク、主に、アムステルダム市とアムステルダム応用科学大学（オランダ語 Hogeschool van Amsterdam、英語 Amsterdam University of Applied Sciences、略して HvA）との連携によって行われるアウトリーチワークについて扱うものである。私は、2015年10月31日から11月14日の日程で行われた、CIF Netherlands 主催の国際ソーシャルワーク専門職交換プログラムに参加する機会を得た¹⁾。そのプログラムの前半の週は、アムステルダムで行われているアウトリーチワークの現場を訪問し、関係者から話を聞くなどした。それを通して歴史・文化や社会的に異なる脈絡にあるソーシャルワークについて考えたことを述べたいと思う。そのプログラムは、HvA のマスターコース、the School of Social Work and Law の教育、研究、実践に長年にわたり携わってこられた Dr. Simona Gaarhuis のコーディネートによるものである。実際に、アムステルダムの地区や現場でどのような実践が行われているのか、HvA ではどのような教育や研究が行われているのか、学生はどんな様子なのかを彼女の豊富なネットワークを通して



写真1 HvA 学生と Dr. Simona Gaarhuis (中央)、そして CIF 参加者

体験的に知る機会となった。写真1は、HvA 学生と Dr. Gaarhuis、CIF 参加者である。

HvA は、80以上のプログラムを持つ学士課程と修士課程を有する学生数43,000人、被雇用者数3,200人のオランダ最大級の高等教育機関の1つである。デザイン・コミュニケーション学部、経済・経営学部、教育学部、健康専門職学部、スポーツ・栄養学部、テクノロジー学部、そして社会科学・法律学部の7つの学部がある。国際的視点から専門職教育の刷新に力を入れており、コンピテンスを高めるための専門職訓練を志向した教育プログラムを提供している。学生は初動期から実践事例や課題をこなすインターンシップに参加する。ソーシャルワークの学部として社会科学・法律学部の歴史は長く19世紀末に遡り、アムステルダム市の社会と伝統によって育まれてきた (www.international.hva.nl)。

オランダでは、分権化政策が進められ、住民に最も身近な市町村レベルの自治体を中心となり、様々なサービスの提供体制を築くこととされている。すべての市民が社会に参加することをめざし、多様なニーズに対応するための自立支援サービス体制が築かれてきた (廣瀬 2008: 49)。それを促進したのが、2006年7月に制定され、2007年1月に施行された社会支援法 (Wet Maatschappelijke Ondersteuning: WMO) である (大森 2006: 88; 空閑 2006: 3; 井原 2006: 34; 廣瀬 2008: 49; 堀田 2012: 393)。

社会支援法は、基礎自治体 (gemeente) レベルで、自助・互助の活用を基礎として、地域に密着した医療・介護・福祉の体制を築き、住民参加を促すことをもって多様なニーズに対応できるようにすることを目的とし、これまでの社会福祉法 (Wet op de Zorg: 1987年制定) と、障がい者福祉法 (Wet Voorzieningen Gehandicapten: WVG: 1994年制定) と、さらに特別医療費 (補償) 法 (Algemene

Wet Bijzondere Ziektekosten: AWBZ: 1967年制定)の一部を統合したものである(大森 2006: 88; 井原 2006; 廣瀬 2008: 49; 堀田 2012: 393)。

オランダは、1968年に、長期化した疾患をカバーする保険として、特別医療費保険を施行した。根拠法は特別医療費補償法(The Exceptional Medical Expenses Act, AWBZ: Algemene Wet Bijzondere Ziektekosten)で、これは日本でいう介護保険にあたる(大森 2003: 38, 2006: 83)。保険者は国であるが、実際の保険の給付は、短期医療保険の保険者である Care insurer (民間保険会社)が代行している。

2007年から社会支援法(WMO)が施行され、これにより、従来は障がい者福祉法のもとにあった住宅改修、移送サービス、車いすの支給等はWMOに引き継がれ、AWBZからは家事援助がWMOの対象に切り替えられた(堀田 2012)。

WMOの導入は、社会保障制度を持続可能なものにするため、地域住民の参加によって、軽度な介護である家事サービスなどの社会支援を、自治体の財源と権限に委譲し実施しようとするものであるが、介護保険の一部が単に自治体に移管されたというだけでなく、自治体や諸アクターの能力によって、社会保障制度の遂行や政策立案の程度や水準が大きく変化するものといわれる(高濱 2013)。

こうしたオランダの政策の方向性と軌を一にし、日本の介護保険制度においても予防給付のうち訪問介護・通所介護について、市町村が地域の実情に応じた取り組みができる、介護保険制度の地域支援事業への移行が行われてきている。

社会支援法は、社会における様々な活動に住民が参加することを求めるものとされ、そこには人々の意識改革がある。つまり、社会福祉は給付されるものではなく、人々の参加によって創造し、獲得するものであるという住民参加型の社会を築くことが理念としてある(空閑 2006: 5)。

日本では地域包括ケアシステムの推進として、自助、互助、公助、共助の理念のもと、医療・介護・予防・住まい・生活支援が切れ目なく住民に身近な地域で提供される仕組みづくりが進められているが、縦割り行政の弊害や組織間関係の利害調整、多職種連携・協働、行政と民間のパートナーシップ、市民と専門職の役割等、そのあり方をめぐっては克服すべき障壁や課題が山積しており、オランダのアウトリーチワークからは学ぶべき点が多くあると考える。

2. アウトリーチワーク

アウトリーチワークは、自ら助けてほしいと声に出して救いを求めることはしないけれども、実際は苦境にあって支援を必要としている人々を発見し、駆け付け、支援する活動である。その人々のもつパーソナル・サポート・ネットワークを最大限に活用し、必要な修復や再形成を試みながら、自立のための支援を行う(Stam=2010)。

安全でない劣悪な環境にいて、社会的に孤立した状況、不安定な状態に置かれている人々、そうした状況を自ら変える術や方法をもたない人々、自尊心が傷つけられ、他者への不信や怒り、セルフ・ネグレクト、破滅的な絶望に陥っている人々の回復を支援するアプローチである。それは、自由と多様性への寛容さの反面で、オランダ社会に影を落とすイスラムの問題(水島 2012)に向き合い、社会的結束の崩壊を防ぎ、社会的統合をめざし、社会の安定を保つための取り組みでもある。

アウトリーチワークは、すべての市民が一人一人自立的に生きること、社会に参加し、社会を構成する市民としてその責任を果たすことが基本的考え方の価値観としてある。「いかにして市民はクライアント、顧客、消費者という“繭に包まれた温かい保護被膜”から抜け出すことができるのか」(Metze, R. “Transition of social work professions towards enabling citizenship” 発表資料)という、ソーシャルワーカーの研究発表でなされた問いかけがそれを端的に示している。すべての市民が参加する社会とは、これまでのような構造化、秩序化、統制された特徴をもつ制度的世界としてではなく、不確かな要素の多い人々の暮らしの生活世界に依って立つ社会として捉える考え方へと転換されていくものと考えられる。そこで示されるソーシャルワーク専門職の役割は、シティズンシップ(市民性)を効果的にすること、権能を付与することに向けられる。不測のダイナミックな相互作用を前提としたプラットフォームにおいて、一時的解決や作業的仮説に取り組み、その責任を家族や親族に返しながら、問題をもつ人自身が問題解決の部分を構成するように働きかける。危機やストレスも問題解決に生かされるものとして捉えられ、トップダウンではなくボトムアップの、当事者のイニシアティブに委ねていくことのできる、そのような必要に応じた裁量を認める考えが打ち出されている(Metze, R. 前出)。ここにオランダ人の合理主義と柔軟性思考を見出すことができる。また合理的思考を実践に移し、それを支える「人々のなかにある社会的関係性の豊かさ、ソーシャルキャピタル」の蓄積がある(紺野 2012: 10)。次に、その状況の一端を紹介する。

3. 「あなた自身の場所」(‘JES’)

「あなた自身の場所」、‘Je Eigen Stek’ / ‘Your Own Spot’ (Tolstraat86) (www.jeeigenstek.nl) は、アウトリーチワークの考えに基づいて実践がなされるプロジェクトであり、運営に携わるスタッフを訪問した(2015年11月5日)。その場所はホームレスを経験したことがある人のためのシェルターで、そこを使用する人々によって運営がされている。特徴は、セルフ・マネジメントによって生活する場が提供されていることである。23歳からの男女のホームレスを経験した人、アルコールや薬物依存症の人を対象としている。

建物の外観は一般の住宅と変わらない。どのぐらいの期間そこにいるのかも本人が決めることができる。目標は、個人の社会復帰であり、退所後の自立生活に向けて互いに支えあうことである。入居者自身の生活と環境の中で彼らのエンパワメントを向上することが重視される。

JESの創設に携わったのは、HVO-Querido(ホームレスの人にケアとシェルターを提供する組織)、アムステルダム市、ハウジング・コーポレーション ‘Eigen Haard’ ‘Alliantie’(オランダの社会住宅を供給する会社)、コミュニケーション・ビューロー ‘De Mat’(ソーシャルワーカーの雇用機関)、そしてJESの創設時の入居者のグループである。HVO-Queridoは、建物、財政支援、司法支援、サービス支援に責任をもつ機関である。アムステルダム市は財政上の資金調達と1年間に5軒の家を供給する住宅の確保に責任を負う。ハウジング・コーポレーション ‘Eigen Haard’は5軒の住宅物件、ハウジング・コーポレーション ‘Alliantie’は6軒の住宅物件の責任をもつ。コミュニケーション・ビューロー ‘De Mat’は、コミュニケーションのコーチングとプロジェクト計画の展開支援に責任をもつ。JESの創設時の入居者のグループは、プロジェクトの積極的参加者として責任をもつ(JESホームページ上 pdf)。

JESのコンセプトは、専門職が入居者の代りに決定するのではなく、入居者自身が自分の生活の方向性を決めることができる場を提供することである。それは入居者が新たな役割を経験し、実践することが許される場でもある。その場所で入居者は個人として、グループとして責任をもつ経験をする。そして自らの状況を振り返ることのできる時間をもつ。将来、自分の家をもつという望みをもつことができる。家を見つけるまでには、平均1～2年かかる。16人の定員のうち、毎年、平均10人程度の入れ代わりがある。2013年に5周年を迎えた時点で、80人以上がJESを住まいとした。その住まいで、

入居者は回復の途上にあるお互いを支えあうこと、日々の取り組みを話すこと、変化に対する動機付けを得ること、家事や他の活動に参加することが期待されている。入居者の日々の活動とは、食事をすること、住まいの清掃、毎週あるミーティングに参加すること、面接をすること、評価をすること、JESの企画やその他の会合に参加すること等である(前出の pdf)。

ソーシャルワーカーやピア・ワーカーは、動機付けのコーチング、エンパワメント・アプローチ、グループ・ダイナミクス、リハビリテーション・アプローチの方法を用いる。入居者が運営するシェルターのもつ価値と発展を大切に、入居者の行動の変化の振り返り、コーチング、動機付け、情報や助言を与えながら個人の支援を行うとともに、グループ過程、集まりへの参加、ピア・サポートの支援をする。また、プロジェクトの内外でその発展を支援し、外部の企業やヘルスケア事業者と連携をする。一緒に行う活動には、入居者が運営するシェルターのプラットフォームを創り、スタートさせ、その活動を発表し、ワークショップを行い、他の活動にも参加していくことである。実践と研究に当事者の人たちも参加し、新たな知識の創出に関わる責任を共有する(前出の pdf)。

達成された結果について、一般的に、シェルターの入居者は、互いにつながったと感じる。彼らは一緒に働いて決めなければならないし、相互に支えあうことができる。それによって社会的スキルを学習する。安心が得られ、入居者が互いにシェルターに責任をもつようになる。これは感謝の気持ちや、才能や能力の(再)発見、自尊心の回復という結果をもたらす。ただ、こうしたシェルターは、特別な問題をもつ場合や入居者にとって刺激となるインセンティブが欠ける場合にはうまくいかないと報告されている(Boumans et al, 2012)。

日本における養護老人ホームなどの措置施設の入居者について依頼心の強さ、感謝の気持ちや自発性の乏しさが職員からいわれることがある。JESの実践研究は、援助のあり方の刷新とはどのようなものかを具体的に例示するものである。

JESは2009年から、「アムステルダム 社会支援ワークショップ」(‘Wmo-werkplaats Amsterdam’)と連携してきた。HvAは、アムステルダム市とJES、他の専門職とともに作業を行い、「事実に基づく実践」と「実践に基づく事実」に寄与する「ナレッジ(知識)・ネットワーク」に取り組んでいる。入居者自身がシェルターを運営していくというコンセプトをどう発展させていくかが課題とされる。

4. 「アムステルダム 社会支援法－ワークショップ」 （‘Wmo-werkplaats Amsterdam’）

「アムステルダム 社会支援法－ワークショップ」は、傷つきやすい・脆弱な人々を支援するアウトリーチワーク研究に焦点を当て、教育機関、自治体、健康・社会制度、自主的自助団体と連携・協働する事業である。オランダ社会支援法（WMO）に基づき、保健省の主導で始められ、「社会福祉革新に向けたアムステルダム知識センター」（Amsterdams Kenniscentrum voor Maatschappelijke Innovatie/ The Amsterdam Centre for Social Innovation、略して AKMI）、HvA の社会科学・法律学部の一部との連携事業として行われている（<http://www.hva.nl/wmo/werkplaats>）。

上述した JES のセルフ・マネジメント・プロジェクトについて、様々な組織団体と大学が連携・協働し、他にも一般化できるか、専門家、実践家、研究者、教師、学生が、実際の訓練と知識を共に創り出す作業を行っている。収容施設のように規則で縛るのでなく、パートナーリスティックな専門家による指導でもない、本人の力を信じ、本人に委ねることによって、持続可能な自立支援の在り方に関する新たな知識の創出に携わる事業である。

Eropaf（家賃滞納で立ち退きになる人々へのアウトリーチワークを展開する支援団体）は、ボランティア組織であるが、自治体や専門家と協働・連携し、滞納による立ち退きを未然に防ぐプロジェクトを展開している。異なる機関の異なる専門職が協働・連携して取り組むものである。滞納による立ち退きを防止することは、ホームレスとなることを防止するのに役立つ。多くの自治体では、家賃滞納による集団立ち退きを回避する協定を結んでいる。HvA と連携し、JES での入居者の自己管理の見守りを行い、協働の実践的訓練や知識について、専門家、実務家、研究者、教師、学生とが一緒に取り組んでいる。

オランダは、知識経済社会として知られる（紺野 2012）。イノベーションと言えば、日本ではものづくりを指すが、オランダでは、日常生活習慣や思考のレベルで進められている。ある意味で、それを可能にするソーシャルキャピタルの蓄積が豊かである。アウトリーチワークもその一つであり、他機関の異なる専門職どうしと一緒に働き、連携し、体制や制度の境界を乗り越え、古い因習的なものとは異なる視点を取り入れ、社会の変化をもたらす新たな価値の創出に向け、様々なレベルのシステムの自律的、主体的な働きと交互作用がある。

5. 「マイコーチ」（‘MyCoach’）

HvA は、学生の職業教育の一貫として「マイコーチ」と呼ばれるコーチング・プロジェクトを提供している。HvA、近隣の地域ボランティアがコーチをする。ユトレヒト大学の教育社会学者ミーシャ・デ・ウィンター（Micha de Winter）の「子どもを育てるには村がいる。おじいちゃん、おばあちゃん、ご近所の人々、子どもは村全体で育てる」という考え方への共感が基礎にある。学生は、個人の発達、専門職としての発達、学業または社会生活上の発達に関して、コーチからスーパービジョンを受ける。「弟子入り、徒弟制度」がマイコーチ・プログラムの中心にある。目標は学生の発達と将来性を刺激することである。これらの説明は「マイコーチ」について書かれた文書（HvA、「知識のストアというボート（船）」“BOOT DE KENNISWINKEL”）に記載されている。それに基づくと次のように説明がある。

関係する市民や企業は、子どもの発達を取り巻く社会的周囲の環境に責任がある。後退する政府や経費削減によって生じてきたこれまでの社会制度へのしわ寄せや苦悩を、この取り組みは緩和するものと理解される。関係者にとっての恩恵は、次のように説明される。

大学にとっての恩恵は、学生の早期退学の防止や学業成績の向上、学習意欲の再動機付け、人生の疑問や困難な社会的条件をもつ学生がよき相談相手を見つけ、発達が導かれる機会を得ること、またフォローアップ研究や就職でよりよい選択をするための学習の機会をもち、社会に踏み出す最初の第一歩を確固たるものにすること、大学/街と「社会」の橋渡しを強固なものにすること、学生にとって「世界」は「敵対する」ものではないことを知ること、各大学が、企業、地区、HvA を新たなパートナーとして認知すること、地区/政治に肯定的に関与するようになること、そして学生のシティズンシップを高めること、が挙げられる。2000年代半ばに、オランダでは、すべての初等・中等教育の学校で民主的シティズンシップ教育を行うことが義務づけられている（リヒテルズ 2010）。

自治体にとっての恩恵としては、早期退学者政策と符合し、自治体の新たな、大きな役割と青少年政策とも一致する。マイコーチはまさに地域プロジェクトとして実施されている。地区（the district）において大学、企業、地域の人々、HvA はそれぞれに存在しながら、パートナーとして共存する。マイコーチ・プロジェクトは、市民と企業の社会への積極的関与を増進するものである。容易にアクセスして、「（個人）参加方式の社会」や「行動する民主主義」の方針の下、「柱状社会」（太田・見原

2006: 125-129) といわれるように、出会いの少ないコミュニティ間の社会的結束を創出し、実りある出会いと話し合いをもたらす。早期退学者を減らすことは、犯罪や関連の社会的費用を削減し、学生のシティズンシップを高めることにつながると期待される。

企業にとっての恩恵は、企業の社会的責任 (Corporate social responsibility、略して CSR) に手足が与えられ、効果的に近隣地域に参加し、得意分野を示すことができる。企業の公共性の獲得も助けられ、スタッフが社会をより深く知る機会や人々との出会いを経験することが含まれる。新たなパートナー、顧客 (学生、大学、他の企業) と出会うネットワーク機能もある。被雇用者が共感を育み、未知の進路にも導かれる。社会的柔軟性が新たな市場と顧客の開発を助け、リーダーシップのスキル獲得にも役立てられる。

コーチにとっての恩恵は、企業の社会的責任 (CSR) の実績にも寄与する。個人の発達としても、コーチの訓練、仲間によるスーパービジョン、オフィシャルなコーチによるガイダンスも得られ、社会での新たな見方を培うことができる。余剰の知識や経験で社会に寄与し他からも承認を得られる。コーチングは、共感を養い、偏見を認識し取り扱うことを学ぶ平和的で配慮のある意思疎通の方法を伝える。仕事や私的な領域でのスキルで行え、雇用者がそれをする自由を認めるものである。

HvA「ポート」にとっての恩恵は、コーチングの現場で知識を発展させることである。教師はコーチやトレーナーとしての自身のスキルを高めることができる。HvAは、プロジェクトのなかで様々な教育実習生を配属できる。学生は実践で彼らの知識を試す機会を得る。コミュニティ、隣人、アムステルダムへの、積極的な関与を形成する。学生は重要な仕事をし、生活経験を得る。実践で知識を試すことができる。研究で使用することができる価値ある経験をした訓練生や学生が、そこでの結果や成果を発展させていくこともできる。

こうした「マイコーチ」のプロジェクトが、大学、自治体、企業、コーチ、HvA「ポート」の関係機関とつながりを持ちながらアムステルダムのアウトリーチワークと連動しているのをみた。次は、地域のプロジェクト・チームについて述べる。

6. 地域の拠点となるプロジェクト

「東部ポート」(‘BOOT Oost’)

マイコーチ・プロジェクトの1つ、東部ポート (BOOT Oost) を訪問した (2015年11月3日)。暫定プロジェクト・マネジャー (Interim Project Manager Live, Work and



写真2 「東部ポート」‘BOOT Oost’ の前で

Money) の Ms. Melanie Verhoef とコーディネーターの Mr. Albert Beije Ramirez に会って話を聞いた。法律を学ぶ HvA の学生がインターンとして参加していた。写真2は「東部ポート」、左から2人目がラミレス氏である。

「ポート」は都市管理の一部ともいわれ、大都市の複雑で不規則な問題の解決にあたる。近隣の安全、生活の質、都市部の発展、通勤・移動、仕事の持続と魅力化など。様々な立場の人が一緒に、効果的な解決を築くにはどうすべきかを学ぶ場でもある。アムステルダムの企業とパートナーシップを組み、教育、研究、実践を組み込んでいく。よりよい都市をめざして貢献するプロジェクトを、研究者、学生、起業家が一緒に動いてつくっていく。教育、研究、実践を一緒に連動して行うシステムである (BOOT Oost、<http://www.hva.nl/boot>)。アムステルダムにおいては、文化的差異、言語の問題、子育てと両親の問題などの困難が指摘され、こうしたシステムが働くことで予防的に、柔軟に、問題へ対応する能力が高められ、いわゆる「イノベーションにも必要な豊かなソーシャルキャピタル」(紺野 2012: 10) の蓄積もなされていくと考えられる。

「放課後のクラシック」(‘klassiek rondom de klas’)

トルコ、モロッコ、カリブ諸国からの移民者が多く住む地区に出かけた (2015年11月2日)。クラシック音楽を一緒にする喜びを子どもたちにと、音楽のレッスンを行う教室が市民の主導で開かれている。指導者の Mr. Michael Hesslink、Ms. Evenaar Ambonplein を訪問した。約35の地区で、住民、両親、友人、バンド・リーダー、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団の (旧) メンバー等、音楽家の自発的な協力によって、学校が終わる放課後の児童たちがバイオリンやトロンボーン、フルートを習い、演奏に参加し音楽を楽しむ喜びを共にする機会をつくり出している。管弦楽の基礎を学ぶオーケストラ (Leerorkest) 財団とアムステルダム東部のいくつかの学校と協力関係にある。隣人との社会的結束を育み、地域のなかで役割をもって人々が社会参加する、社会文化的



写真3 「放課後のクラシック」‘Klassiek rondom de klas’の様子

発展に貢献する活動である（‘klassiek rondom de klas’、www.klassiekrondomdeklas.nl）。（写真3）

「安全な家」（‘Veilig thuis’）

家庭内暴力と児童虐待の助言・通報センター（Advice and Report Center for Domestic Violence and Child Abuse Amsterdam-Amstelland）から、啓発、指導、教育、忠告、助言、情報の提供と予防協力を仕事とするワーカーの Ms. J. Laks から説明を受けた（2015年11月3日）。「安全な家」には、児童虐待（AMK）、危機センター（JBRA）、家庭内暴力センター（SHG）、成人と子供のセーフティネットの機能をもつ安全な住まいの提供（GGD）の4つの機能があり、カウンセラー、社会精神科看護師、嘱託医師、臨床心理士の専門職が配置されている。家庭内暴力や児童虐待に対するアムステルダム市のアプローチは、自治体の政策方針を示す「安全な家」というビジョンに基づいて扱われる（‘Veilig thuis’、<https://www.amsterdam.nl/zorg-welzijn/huiselijk-geweld/>）。

初動期の10ポイントとして説明されたのは、

1. 子どもの優先。
2. 市の家庭内暴力と児童虐待の地域のスペシャリストをおくこと（多言語に対応）。
3. 「安全の家」、シェルター、警察、援助機関の協働に焦点をおくこと。
4. 透明性のある明白な、信頼のおける、細心の注意でもって対応すること。
5. 1つの家庭に、1つの計画、1人のディレクターを配置すること。
6. 短期、長期の安全確保。
7. 家庭内暴力と児童虐待を取り扱う際の一貫性。
8. 家族システム志向。
9. 自立の最も持続可能な源となる自身の個人的力と矛盾しないこと。
10. 安全性を保証するため、必要な時だけ情報を共有すること。

兆候を報告する過程は次のようになる。ステップ0 兆候を認める、ステップ1 兆候を図式化する、ステップ2 同僚や「安全の家」と相談する、ステップ3 クライアントと話す、ステップ4 疑いのある暴力や児童虐待の深刻さを測る、ステップ5 支援を組織するか、「安全な家」へ報告するかを決定する。そのための話を聴き、尋ねることに集中する。報告後はトリアージに沿って、優先順位を決定する、緊急性はあるのか？ 家庭訪問、電話による対応で探査し、適切な支援につなげる。そこから終結するのか、地域の支援（「力を合わせ、互いに協力する」‘Samendoen’）につなげるのか、専門分化された支援につなげるのか、医師が法的に認定した支援に送致するのか、支援の方法は分岐していく。

「力を合わせ、互いに協力する」（「サーメン・ドゥーエン」‘Samendoen’）

地域の支援の代表的なものに、「一まとめにする、統合する、互いに協力する、力を合わせる」という意味の「サーメン・ドゥーエン」（‘Samendoen’）がある。これは地区の脆弱な世帯に焦点を当てた学際的なチームで、アムステルダムの自治体が設置し、市内に22チームがある。自治体のサービスや福祉の専門的ケアの提供者で構成される。地区内のすべての福祉団体や機関と緊密に連携がとられる。様々に異なる組織から専門職が出され、仕事、関係、子育て、教育、お金（債務）、住宅、健康、安全にかかわる難しい複雑な諸問題について第一線で対応する。「サーメン・ドゥーエン」チームは、コミュニティ・センターなど地区の中心に設置され、1家族/世帯に、1つの計画、1人の支援者がつく。家族、友人、隣人やボランティアの助けを借り、一緒に解決策を見つけるために働く。上述の家庭内暴力の地域支援の受け皿ともなる（‘Samendoen’ <https://www.amsterdam.nl/zoeken/>）。

アムステルダムの東部、オランダ領東インド（Indisch）と名付けられた地区があり、そこにある、「サーメン・ドゥーエン・東部チーム」‘Samen Doen Team Oost’ / ‘Doing Together Team East’（Niastraat 7ths）を訪問した（2015年11月5日）。そこはカリブ諸国、トルコ、モロッコからの移民の集住地区となっている。その地区で育った青年らがその地区のソーシャルワーカーとなって働いている。このチームができる前は、街は危険で劣悪な地区だったと話した。そのチームは、‘Streetsmart’（Amsterdam Oost）という地区の人々がアートを通して自分を発見し、才能を開花させ、それを共有するプラットフォームとして提供されている（www.street-smart.nl）。（写真4）

その場所と同じ近隣地区に、コーヒーショップ（ソフ



写真4 「サーメン・ドゥーエン・東部チーム」
'Samen Doen Team Oost'



写真5 地域の居場所

トドラッグを個人使用のために販売する店)がある。オランダは、「寛容と合理主義の精神に基づく」(太田・見原 2006)といわれるが、その店主と、「サーメン・ドゥーエン」東部チームは柔軟な協力関係にある。環境にあるリスク要因も排除せずに包含した中で予防的、防衛的対処の能力を蓄える。社会住宅の店舗をアートに使われるスペースとして貸し、街を再開発する。学校、プレスクールの他に、住民が集い憩う居場所(写真5)や青少年が音楽の演奏やCDの制作、ダンスやエクササイズ、料理など、自由に自己表現できる場所を提供する施設がつくられている。このチームにも、HvAの実習生が参加していた。

7. まとめにかえて

HvAの構内は、ミーティングのための場が大変に充実している。建物の地下には巨大な駐輪場があり、貸し出し用の自転車も設置されている。私たちはそれを使って訪問先を訪ねた。日常的な出会いと話し合いが促される合理的な空間とネットワークづくりの整備が行われている。そこで寄与する社会住宅の役割は基本的要素とい

える。

オランダのアウトリーチワークの取り組みは、既存社会の制度の硬直さ、権威主義や専門職主義の不合理な側面を見直すものであり、合理性と柔軟性の精神に基づいて人々の意識を改革する社会的な実践でもある。実践から事実を得、事実を基に実践を行う、こうした知の循環とネットワークが社会のなかで形成され、知識の刷新と創出が、個々人の自律性と協働性によって支えられている。アウトリーチワークは、すべての個々人が社会に参加する体制づくりの現場といえる。

謝辞

CIF The Neherlands 理事長 Ms. Mieke Weeda、プログラム・コーディネーター Ms. Jenny Pourier、Amsterdam University of Applied Sciences, the School of Social Work and Law のコーディネーター Dr. Simona Gaarhuis、ホスト・ファミリーでありプログラム・コーディネーターの Mr. Max de Coole and Ms. Anke de Coole-Feenstra、訪問を受け入れてくださった方々に感謝を申し上げます。そして、CIF ジャパン元理事長竹内和利様(平成28年8月19日ご逝去)に、謹んで哀悼の意をささげ、これまでのお導きに心より感謝いたします。CIFの坂岡隆司様、並びに理事・会員の皆様方にお礼申し上げます。

注

1) CIFとは、The Council of International Fellowshipの略。CIFは、対人社会サービス従事者の国際研修をつうじて、国際理解と世界平和の進展をめざす組織で、1960年にCIF Internationalを組織、1986年CIF ジャパンが結成され、CIF国際グループに加盟した。CIF Netherlandsは、「各国による研修プログラム」を実施しているオランダの支部である。

文献

- Amsterdam University of Applied Sciences, Hogeschool van Amsterdam, www.international.hva.nl
- BOOT Oost <http://www.hva.nl/boot>
- Boumans et al. (2012) 'Nu leef je zelf' Een onderzoek naar zelfbeheer in de maatschappelijke opvang. Utrecht: trimbos-instituut. <http://www.jeeigenstek.nl/uploads/Amsterdam%20HvA%20template%20Je%20Eigen%20Stek%202014.pdf>
- Eropaf <http://huisuitzetting.info/huisuitzettingen/home.aspx>
- 廣瀬真理子 (2008) 「オランダにおける最近の地域福祉改革の動向と課題」『海外社会保障研究』No. 162, pp. 43-52.
- 堀田聡子 (2012) 「ケア従事者確保に向けた諸課題—オランダの経験から—」『季刊・社会保障研究』pp. 382-400.
- 井原辰雄 (2006) 「オランダにおける高齢者および障害者に対するケアに関する施策について」『海外社会保障研究』No. 154, pp. 26-36.
- JES <http://www.jeeigenstek.nl>, <http://www.hvoquerido.nl/jes.html>
- <http://www.jeeigenstek.nl/uploads/Amsterdam%20HvA%20template%20Je%20Eigen%20Stek%202014.pdf>
- klassiek rondom de klas www.klassiekrondomdeklas.nl
- 紺野登 (2012) 『幸せな小国オランダの智慧 災害にも負けないイノベーション社会』PHP 新書

- 空閑浩人 (2007) 「オランダ・ソーシャルワークを取り巻く社会的・文化的状況—WMOの成立と住民参加によるコミュニティ・ケアの推進—」『評論・社会科学』82号, pp. 1-30. https://doors.doshisha.ac.jp/opac/opac_link/bibid/SB00961338/?lang=0
- Metze, Rosalie (2015) 発表資料 “Transition of social work professions towards enabling citizenship” 2015年11月4日 (HvA location WH Wibautstraat3 4C 02, Practice, education and research towards Outreach Work)
- 水島治郎 (2012) 『反転する福祉国家—オランダモデルの光と影—』岩波書店
- Mycosach HvA, “BOOT DE KENNISWINKEL” 提供された配布資料 National Social Report—The Netherlands— (2014) April, file:///C:/Users/kayok/Downloads/NSR%20Netherlands%202014%20ENG%20def.pdf
- 太田和敬・見原礼子 (2006) 『オランダ寛容の国の改革と模索』寺子屋新書
- 大森正博 (2003) 「オランダの医療・介護保険制度改革」『海外社会保障研究』No. 145, pp. 36-52.
- 大森正博 (2006) 「オランダにおける医療と介護の機能分担と連携」『海外社会保障研究』No. 156, pp. 75-90.
- リヒテルズ直子 (2010) 『オランダの共生教育』平凡社
- Samendoen https://www.amsterdam.nl/zoeken/?gsa_search_site=&gsa_search_rve=&gsa_search_orig=&proxystylesheet=amsterdam_nl&getfields=&filter=0&site=amsterdam_nl&client=amsterdam_nl&tlen=120&lr=lang_nl&entsp=a__amsterdam_zorg-welzijn&q=samen+doen
- Stam, M. et. al. ed. (2008) Outreach work for threatened eviction: Research and development centre De Karthuizer, (=2010, Translation Hammons, S.) Hogeschool van Amsterdam.
- StreetsmArt www.street-smart.nl
- 高濱黄太 (2013) 「社会保障制度における分権化と参加—オランダ社会支援法 (WMO) の導入を巡って—〈要旨〉」『龍谷大学大学院政策学研究』第2号, pp. 177-182. <http://hdl.handle.net/10519/5278>
- Veilig thuis <https://www.amsterdam.nl/zorg-welzijn/huiselijk-geweld/Wmo-werkplaats-Amsterdam> <http://www.hva.nl/wmo/werkplaats> (掲載したすべてのURL: 2016年6月24日アクセス)

The Outreach Work in Amsterdam, Netherlands

TAGAWA Kayoko

The outreach work initiatives by the Netherlands review the rigidity of the existing social system, the absurdity of authoritarianism and the principle of professional employment. They are also a social practice that helps to raise people's awareness based on the spirit of rationality and flexibility. Such circulation of knowledge and networks through obtaining facts from practice and basing practices on facts are formed within society, while knowledge innovation and creation is supported by personal autonomy and collaboration. Outreach work can be considered the site where the system of participation of all of society's individuals is formulated.